

---

**スイッチ×2=大変です…**

ワト

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スイッチ×2＝大変です…

### 【NZコード】

N5290Z

### 【作者名】

ワト

### 【あらすじ】

高校の入学式当日に遅刻した俺、峰斗は生徒会長に捕まってしまふ。さらに昔助けた女の子とその会長がいきなり彼女の立候補に…。  
・しかも2人共可愛いときた…これからどうなるんだ、俺

⋮

今日は高校の入学式…なのですが俺武原峰斗は只今絶賛遅刻中です、何故入学式に遅刻?と思うかもしけんがそれは、あの時計のせいなんです…高校に受かったと同時に一人暮らしをはじめ毎日同じ時計のアラームで朝起きてたはずなのに今日に限つてあの糞時計ならなかつたんです…だから只今俺は絶賛遅刻中なんです。

「そここの生徒、新入生だろ何故入学式の日から遅刻している?」

「うわあ綺麗な人だなあ…生徒会の腕章をつけているって事はこの人生徒会の人なのかな?」

「何を黙つている?それにその前髪長くないか?入学式の日なんだからちゃんとしないかッ!」

「えつすいません…じゃあ俺体育館に行きますんで」

「ちょっと待て前髪はどうするんだ?」

「ああ前髪どうしようかな…今からじやどひじみつもないひとりあえずこのまままで行こうかな。」

「明日切つてくるんで今日は勘弁して下さい」

「いや今どうにかしないとな、そうだッ!私が切つてやる」

「いっいいえ結構です…それに髪切れるんですか?」

「大丈夫だ私に出来ない事はない、だからちょっとついてこい」

目の前にいる綺麗な人は、峰斗の腕を掴むとまだよくわからない学校の中を引っ張り生徒会室につくとドアを開けて入った。

「さあ中に入れ、誰もいないからつて変な気は起こすなよ?ただ前髪を切るだけなんだからな」

「起こしませんよ…早く前髪を切るなら切つて下さい」

「わかつている動くなよ?動いたら変になるからな」

峰斗が頷くのを確認すると、近くにあつたハサミを取りだし前髪を切りはじめた…。

「あつあの切りすぎじゃないですか…?」

「大丈夫だこの位でちょうどいい！」

前髪を切り峰斗の顔が見えるようになると急に顔を赤くはじめた。

「急に顔を赤くしてどうしたんですか？もしかして風邪ですか？」

「君の名前はなに？よかつたら教えてくれない？」

「おっ俺の名前ですか？俺は武原峰斗です」

「そつか武原峰斗か…彼女や好きな人はいるの？」

さつきからこの人おかしいような、それに雰囲気が変わった気がする…。

「いいいないですけど…ってこんな話しあが恥ずかしいだけじゃないですか？」

「あつごめんね？彼女とか好きな人がいるのかなあつて気になつて…」「いや謝らなくともいいです…でもどうしてそんな事が気になるんですか？」

「それは…あのさ峰斗君に彼女がいないなら私立候補していいかな？てかさせて下さいッ！」

立候補…？立候補…？何で今日初めてあつた人がそんな事言つわけ？意味がわからない…。

「あつあの…俺は先輩の名前も知らないし、てか何も知らないんですけど」

「あつ忘れてた…えつと私は一年の立花美紀です、一応生徒会長です」

「立花先輩ですか…でも何で俺の彼女に立候補するんですか？」

「それは…言わなきや駄目かな？恥ずかしいんだけど…」

恥ずかしい、言いたくない、立候補…もしかして一田惚れ…？

「理由がわからないと立候補はちょっと…」

「えつ…笑わないでね？私峰斗君に一田惚れしたの、だから立候補したいの」

やつぱり俺が思つてた通りだつたか…。

「でも立花先輩つて綺麗だから彼氏いるんじゃないですか？それに

男子から人気そうだし」

「あのさ立花先輩って呼ばれるのいやかも…あと私彼氏なんてでき  
た事ないよ?」

「本当にできた事ないんですか!…いそつなのに…名前は立花先輩  
以外なら何て呼ばれたいんですか?」

「本当にいないよ、いたら立候補何でしないし…名前は美紀つて呼  
んでほしい」

美紀か…美紀先輩、美紀さんどうちで呼べばいいんだろ?

「あつでも美紀に先輩とかさんとかつけないでね?呼び捨てで呼ん  
でほしいの」

「でも歳上だし…それに生徒会長なんですね?歳下の俺が呼び捨て  
にしたら周りの先輩達が…」

峰斗が顔をしかめながら言つと、美紀はああと理解したように頷い  
ていた。

「だから呼び捨てにはできませんよ…美紀さんか美紀先輩つてなら  
呼べますけど」

「ううんじゃあ他の人がいるときはそれでいいけど、2人の時は美  
紀つて呼んでくれる?」

「まあ2人になる事があれば…つてこんなゆつくり話をしてる場合  
じゃないんですよ、入学式始まるじゃないですか」

「あつそうだつた…じゃあ早く髪切り終わらないとね」

ハサミを前髪に近づけると凄い速さで切り終わった、そしてお礼を  
言うと峰斗は、生徒会室から出て体育館に向かつた。

「峰斗君かつこよかつたなあ…私一日惚れ、いや男の子を好きにな  
つたの初めてかも」

「会長、そろそろ体育館に向かわないと入学式が始まりますよ」

「ああ由香か…わかつた今すぐ向かう、入学式には遅れられないか  
らな」

美紀はそう言うと体育館に向かわないと入学式が始まりますよ  
が席を探していた。

「席どこだよ…こんなに人が多かつたら見つからないよ」

「あつあのお…あなたの席多分私の席の隣だと思います」

声のしたほうを見てみるとそこには、眼鏡をかけ髪を田までおろしたいかにも地味な女の子がいた。

「あつありがとうございます…ってだれ？知り合いませんよね？」

「私は皆川ヒメっていうします、多分同じクラスになると想ひ…とりあえず席につくよ」

「そうだね…あつ俺武原峰斗っていうんだこれからよろしく」

「うんよろしく、じゃあ行こうかもうすぐ入学式始まるし」

峰斗は頷くと、前を向き歩き始めたヒメの後ろをついていった、そして席につくとすぐに入学式が始まり校長の話し、新入生代表の話し最後に生徒会長の話しが始まった。

「ねえ峰斗君、生徒会長の人綺麗だね、私とは大違ひ…」

まあ確かに綺麗なんだけど、さつきあんな事があつたからあんま直視できないんだよね…

「確かに綺麗だけど皆川さんだって髪を上げて眼鏡をとれば…」

「うそ…？まじで可愛いんだけど…髪を上げれば美紀さんと同レベルかもしけれない…」

「ちよつちよつと峰斗君…？髪上げないで、私顔に自信がないからこんな風に隠してるのに…」

「それ本気で言つてる？本気で言つてるならそれは間違いだよ…」

「それどうゆう事？、もしかして私が思つてる以上に酷いの！？」  
まああるいみ酷いかも…こんな可愛い顔で自信がないとか他の女の子が聞いたら絶対怒る…。

「皆川さんが思つてるほつの反対、皆川さん自分じゃ顔に自信がないって言つてるけど、俺はそんな事ないと思つだつて普通に皆川さん可愛いもん」

「えつ…？私が可愛い…いやいや絶対にそんな事ないよ、もしかして峰斗君つてB選…？」

皆川さんを可愛いって言つてB選なら他の女の子なんてどうなるん

だろ…。

「おいそこの一 年2人、話してないで私のいや生徒会長の話しきりつけ！？」

あつ気づかれた、まあ俺は知らないフリをして無視するんだけど。「皆川さんと話すの楽しいけど今は静かにしどこつか、あの生徒会長に怒られるし」

「そうだね、楽しいけど先輩に怒られるの怖いし静かにしてるよ」2人は互いの顔を見ながら笑うと前を向き美紀の話を聞き始めた、そして入学式が終わり教室に行こうと2人で廊下を歩いていると後ろから声をかけられ立ち止まつた。

「おいお前達、さつき私の話を聞かずに話していた2人だな？」  
「あつ生徒会長さん…峰斗君、どうしよう怒つてるのかな？」  
「怒つてるよう見えるけど…まあ別に大丈夫なんじやない？」  
ただ気になるのは、口調と雰囲気が立候補するつて言つた時と全く違う事なんだよね…。

「何故私の話を聞かずに2人で話していたんだ？それとお前は武原を何で峰斗君って呼んでいるんだ」  
あれ峰斗君つて呼んでたのに今武原つて…何で？  
「えつと友達だから？峰斗君と私つて友達だよね？」  
「まあ皆川さんがいいなら友達だね、今日初めて会つたばかりだけど」

「じゃあ友達で、あれ？生徒会長さん何で峰斗君の名前知ってるの？知り合いで？」

ここで知り合いつて言つたらおかしいよな…普通入学したばかりの人が生徒会長と知り合い何てありえないし。  
「私は武原の彼女候補だ、だから知り合いで上だな」  
「ちょっと美紀さん！？こんな人に多い所で何言つてるんですか」「私は彼女候補じゃないのか…？私はてつきりもう彼女候補だと思つてた」

峰斗は、新入生や先輩達からの殺気がこもつた視線を感じ焦つてい

た。

「ちょっと待つて下さいッ！何で初めて会ったはずの生徒会長さんが彼女候補何ですか？」

ヒメが言つた事に周りにいた男子達も頷いていた。

「それは、私が武原の彼女に立候補したからだ」

「つて事は峰斗君に一日惚れしたつて事ですね？」

「まあ そうなるな、それに一日惚れしたから彼女に立候補したんだ」

「じゃあ私も峰斗君の彼女に立候補しますッ！」

周りにいた男子も峰斗も美紀も急な展開に理解ができていなかつた。

「峰斗君ごめん… 私一回峰斗君に会つた事あるんだ、覚えてないかもしれないけど…」

「俺と皆川さんが会つた事あるの！？」「ごめん覚えてない…」

「私と峰斗君が会つたのは、去年の夏で男子に苛められてる所を助けてくれたの」

「俺色んな人を助けてるからなあ… 去年の夏だって10人は助けたし。「叩かれたり悪口言われたりしてると私を男子達から守つてくれて、その後も色々優しくしてくれた」

「ごめん覚えてない… 何かヒントがあれば思い出せるんだけど」

「じゃあポチって言えば思い出す？」

「ポチ… ポチ！？ あのいつまでもついて来たから何となくポチつてあだ名をつけた女の子か…」

「思い出したみたいだね… 私があの時峰斗君が助けてくれたポチです」

「まじでポチなの…？全然気づかなかつた」

「へへへ、私は最初から気づいてたんだけど言い出せなくて」

「でもあの時のポチが皆川さんでみんなに可愛いなんて…」

「武原、話についていけないんだか… 結局こいつは知り合いなんか？」

「知り合いのポチです、今思い出しました…」

「知り合いじゃありません、私は峰斗君のペツトのポチです」

ペットと云う言葉を聞いて周りにいた人達も近くにいた峰斗や美紀も固まってしまった。

「ほりあの時峰斗君がお前、昔飼つてたペットみたいって言つてたし

「だからってペットはないんじゃ……俺ポチがペット何て言つてないよ」

「私がなるつて決めたからいいの、それに最初はペットかもしけないけどいつかは彼女になるんだから」

最初も何も人間のペット何ていらないんだけど……。

「おこそここの男ッ！こんなか弱そうなな少女をペット扱いとは何様だ」

周りにいる野次馬を押し退け知らない男が峰斗の胸ぐらを掴んで大声で言つた。

「お前誰だよ……それに俺はポチをペット扱いなんかしてねえ」

「僕はレディの憧れの的高谷正樹だッ！」

「いや知らないし……それにレディの憧れの的つて自分で言つて恥ずかしくないの？」

「僕は本当の事を言つているだけだよ、それはこの美貌を見ればわかるだろ?」

美貌つてこいつ別にイケメンじゃないしてか普通より下だ。

「とりあえず離してくれない？苦しいんだけど……」

「いや離さないよ、僕はこのか弱そうな少女がペット扱いされてるのが許せないからね」

「おい……峰斗君が離せつて言つてるんだから、わざと離しやがれツ！」

ポチが変わった!?チワワから土佐犬並みに変わった……。

「僕は君がペット扱いされないようこの男と話しているんだよ、それこれから君に近づかないよ」

「誰がそんな事を頼んだ？むしろ私は峰斗君のペットでもいいから側にいたいんだよッ！」

「君の名前は何て言うんだい？僕は今から君の事を助けるんだから名前位聞いてもいいよね？」

「こいつポチが言つてる事を全然聞いてない…」。

「私の名前はポチだよ、峰斗君がポチつてつけたんだからそれが私の名前だ」

「違うそれは君の本当の名前じゃないだろ？」

「私はポチだ峰斗君のペツトのポチだッ！」

「だから君はこの男のペツトじやないんだよ…まさか洗脳しているのか！？」

「うわあこいつうざ…周りにいる人達も明らかに引いてるし。

「君がこの男のペツトで側にいたいというのは洗脳されているからだ…よしあーこれからはずっと僕が君の側にいてあげる、だからこの男の事は忘れるんだ」

「私は峰斗君以外の人の側になんかいたくない、それにお前みたいなナルシストで上から目線の奴の側はもつといたくないッ！」

「僕の優しさがわからないとは…もういい穩便に済ませようと思つたがやめだ、今からこの男を叩きのめす」

胸ぐらを掴んでいた手を峰斗から離すとおもいつきり峰斗の顔を殴つた。

「いつてえ…急に殴る事ないだろ？それにお前勘違いしちゃダメ」

「峰斗君の顔を殴つた…もう許さない」

「それは私も同感だ、私の好きな人を殴る奴は許さん」

「生徒会長さん、あなたもこの男に洗脳されてるのか…お前はそんなにレディを待らせたいのか？最低の奴だな」

最低と言われた峰斗は一瞬キレそうになつたが必死にキレるのを抑え我慢していた。

「君達2人もそうだ、洗脳されたからといってこんな最低の男を好きになるなんて…僕を好きになつていればよかつたのに」

「ははは、お前どんだけ俺を悪く言えばいいんだよ…それに2人がお前の事を好きに？絶対にならねえよッ！」

峰斗が言つた事に2人も頷いていた。

「それはこの美貌を見てから言つてほしいね、君より僕のほうが格好いいんだから2人も君より僕を好きになるはずさ」

「この中の下のナルシスト野郎が…お前友達いねえだろ?」

「最低な君に関係ないだろ、それに僕は女の子の憧れの的なんだよ」「じゃあ周りにいる女子に聞いてみようぜ…こいつは周りにいる女子達の憧れの的がどうかをよ」

完全にキレた峰斗は正樹にそう言つと近くにいた女子に聞き始めた。

「美紀やポチはこいつの事どう思う? 憧れの的か?」

「そんなわけないだろ、私は武原以外の男には興味ないしな」

「私も峰斗君以外の男の人以外興味ない、それにあのナルシストはまず生理的に無理」

「そうだよなじやあ他の人達はどうだ、こいつは憧れの的か?」

大声で近くにいた人達に聞くと周りにいた人達は首を横に振つたり違うと叫んだり返事を返してくれた。

「どうだ、お前は憧れの的じゃないんだってよ…」

「ここにいる女子全員を洗脳したのか…君はどれだけ最低なんだ?」

君みたいな男は僕が絶対に叩きのめす」

正樹はそう言つと、峰斗に近づきまた顔を殴ろうとした…しかし完全にキレている峰斗はそれを避けると正樹の頭に回し蹴りを食らわせた。

「何回も殴らせるかよ…つてこいつ氣絶してるし」

気絶しているとわかつた峰斗は苦笑いしていた、そして周りにいる人達からは歎声が上がり峰斗達の周りは騒がしくなつていた。

「こいつ口だけだつたんだな…にしても勘違いしそうだろ」

「峰斗君つて強いんだね? 助けてもらつた時は殴られてただけだから知らなかつた」

「まあ今回は特別つて事で、普段はキレイなから殴る事もないし」

「これは生徒会長として許してはいけない事だ…しかし今回はいつもが一方的に悪いから内緒にしておこう」

「それほどのも…つてこつまでもいいで騒いでたら先生達が来るな

…」  
さすがに騒ぎを聞きつけたのか先生達はもうこの場所に向かっていった。

「仕方ない…皆さんがいい加減ここから逃げないと先生達が来ますよ、  
それじゃあ俺達は逃げるんで皆さんも逃げて下さいね」

峰斗は周りにいる人達に大声で叫ぶと美紀とポチの手を握つて走り始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5290z/>

---

スイッチ×2=大変です…

2011年12月17日22時48分発行